

トマス・ハーディ

31 出稼ぎ女の悲しい物語
(182-)

I

ウィニヤード峡谷から ながいながい一日を
ながいながい 一日を
わたしたちは 北に向かって歩きました
これまでもなんども通った同じ道
太陽はギラギラと背を焦がし 5
背囊は肩にめりこんで
掘割り道 田圃道 通行税取立道を通りすぎ
物悲しげなセッジ・ムアを巡ってゆきました

II

まる二十マイルを わたしたちはてくてく歩きました
わたしたちは てくてく歩きました 10
わたしの情夫と からかい屋のジョン
そして リーばあさんとわたし
日が西に傾くころ
険しいポルドンの頂上に登りました
そして 見渡せる景色のなかでもっとも美しい 15
夕日に輝くあの旅籠が見えてきました

III

幾日も 二人は並んでいっしょに歩きました
いつも 並んでいっしょに
グレイトフォレスト 広大なブラックムアを
そして パレット川が流れるほとりを 20
メンディプの尾根では 突風に逆らい
橋のないヨウ川は 手を取りあって渡り
マーシュウッドの無数の蝸にも 仲良く刺されて
わたしと 情夫は

IV

人稀な旅籠が 情夫とわたしは好きでした 25
情夫と わたしは
「玉鹿館」 喉うるおす水もない山頂の「風笛庵」

ヒントック村共有地の「^{ザ・ホース}龍蹄館」
ウィニヤード峡谷のちんまりした^{はたご}旅籠
プレディ丘では名高い「^{ザ・ハット}草廬庵」
そのほか 人目につかずにすわれるような
あちらこちらの路傍の^{タッブ}居酒屋

30

V

その日 とぼとぼ歩きながら ああ 死ぬほど退屈な
死ぬほど退屈な 一日でした
わたしは ^{かれ}情夫を気紛れにからかいました
退屈しのぎの気紛れに
からかい屋のジョンと並んで歩き
ジョンの手をわたしの腰に巻きつけて
^{かれ}情夫の不機嫌な顔には
目もくれようともしませんでした

35

40

VI

こうしてボルドンの頂上に ようやくわたしたちは
ようやく わたしたちはたどり着きました
そして日が沈むころ その^{はたご}旅籠に入ってゆきました
人ぞ知る「^{マーシャルズ・エルム}鎮守乃榆庵」
メンディップから西の海まで
岩山と草原が眼下に^{ひら}開け
これほどの景勝の地は
この王国にも ^{くに}ふたつとないことでしょう

45

VII

長椅子にみんな並んで
四人みんな並んで 腰かけました
わたしはジョンの隣りにすわって
言い寄られ 口説かれた振りをしました
するとジョンが わたしを膝にのせ
今度は自分が恋の相手だ
だから リーばあさんが
^{かれ}情夫の相手にまわれ と悪たれたのです

50

55

VIII

するとそのとき 今まで聞いたこともない
今まで聞いたこともない ^{こえ}声音がして
愛する^{かれ}情夫が わたしにむかつて
「^{おとこ}奥様 ひと言お尋ねいたします

60

身籠^{みごも}ったその子はどなたの子です
手前が今まで尽くした挙げ句 まさか彼奴^{あやつ}の子供では？」
神かけてジョンの子ではなかったのに ああ
わたしは^{うなず} 頷きました なおも彼をからかって

IX

その瞬間^{とき}彼は起ちあがり そしてナイフで 65
そして ナイフで
からかい屋のジョニーの命を絶ちました
そうです そこで 日暮れどき
傾いた入り日の光が そばの窓から射しこんで
ジョンの血とどんよりした目を 金色^{こんじき}に染めました 70
リーばあさんとわたしが ほとんど
気づく間もない出来事でした

X

旅籠^{はたご}では 悲しい話が
悲しい話が 噂にのぼります
イヴェルチェスター刑務所で 75
わたしの恋人 愛する人がぶらんこ往生した噂
困りに困って馬一頭を盗んだほかは
これまでに 一度の悪事も働いていないのに
(ブルー・ジミーは最後にぶらんこ往生とげるまで
たくさんの馬を盗んでいます) 80

XI

それから先は わたしは独りで渡り歩きました
独りで 独りで
彼の死んだ日 わたしは呻き苦しんで
彼の^う子供を死産みおとしました
刑務所のすぐ近く 一本の木の下で 85
誰ひとり付添うものもなく それというのも
リーばあさんは グラストンですでに亡くなり
わたしは荒野に 独り取り残されてしまったのです

XII

そして夜 ぐったりと横になっていると 90
ぐったりと 横になっていると
木の葉が頬に舞い落ちて
赤い月が低く傾いたころ
わたしが死ぬほど接吻^{くちづけ}したかったあの人の亡霊が

現れ出て 訊^きくのです 「さあ 答えてくれ
あれは俺の子だったのか それともジョンの？
教えてくれ 安らかに眠れるために」

95

XIII

もちろん わたしはそのとき答えました
わたしはそのとき 亡^か霊^れに答えて言いました
ふたりが唇^{くちびる}を合わせ 愛^あを誓^{ちか}ってそれ以来
どんな男^{おとこ}からも 操^{みさお}を守^{まも}ってきた ということ
それを聞いて 亡^か霊^れは微笑^{ほほえ}み 消^きえ去^いりました
風^{かぜ}が立ち 朝^あ日^ひを呼^よび起^おこす時^{とき}刻^{くわ}がきたので
——それも今^{いま}では遠^{とほ}い昔^{むかし} わたしはこうしてただ独^{ひと}り
ウエスタン・ムアをしばしば訪^まれ 彷徨^{さまよ}うのです

100

(山中光義訳)